

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXX)¹—

茂 木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： シュカの誕生，死の前兆，時，厭離，出家，ヨーガ

[309 章] (B.321 章，C.12044-12137，K.329 章) シュカの生涯 (1) 学問と厭離²

ユディシュティラは言った。

- (1) ヴィヤーサの息子シュカは，かつてどのようにして厭離 (nirveda) に至ったのですか。私はこのことを聞きたいのです，クル族の長老よ。私は知りたい気持ちが強いのです (kautūhalaṃ)³。

¹ 本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXXIX)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 9 号 pp.327-353 に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1889]: E.W. Hopkins, The Social and Military Position of the Ruling Caste in Ancient India, As Represented By The Sanskrit Epic, JAOS vol.13, 1889, pp.57-374. (Published as a monograph at New Haven Conn. in 1889.)
- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata, JAOS vol.23, 1902, pp.109-155.
- Hopkins[1902-2]: E.W.Hopkins, Phrases of Time and Age in the Sanskrit Epic, JAOS vol.23, 1902, pp.350-357.
- Hopkins[1903]: E.W.Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS vol.24, 1903, pp.7-56.
- Hopkins[1910]: E.W.Hopkins, *Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic*, JAOS vol.30, 1910, pp.347-374.
- Strauss[1912]: Otto Strauss, Ethische Probleme aus dem “Mahābhārata”, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- Pandey[1969]: Raj Bali Pandey, Hindu Saṃskāras, Second Revised Edition, Delhi-Varanasi-Patna, 1969.
- 原 [1979]: 原 實「古典インドの苦行」春秋社 1979.
- Hara[1980]: Minoru Hara, Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit Guru and Ācārya, Sanskrit and Indian Studies (Essays in Honour of Daniel H.H.Ingalls), 1980, pp.93-118.
- 中村 [2000]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(下) 平楽寺書店 2000.
- Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, Grammar of Epic Sanskrit, (Indian Philology and South Asian Studies 5) Berlin 2003.
- Hara[2010]: HARA Minoru, Mṛtyu –The Hindu Concept of Death–, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No.68, Tokyo, 2010, pp.95-141.

² Otto Strauss は，この章を，悲観主義的叙述の中に，楽観主義的希望の音が響き渡っていると評価している。(Cf. Strauss[1912]: p.216(24)) K.326-328 章は P. の本文にはない。

³ B., C. はこの後に次の詩節を挿入している。

avyaktavyaktatattvānāṃ niścayaṃ buddhiniścayaṃ / (未顕現と顕現の諸原理に関する確定知は，統覚によって確定される。)

ビーシュマは言った。

- (2) 父ヴィヤーサは、世間的善行を行うことで⁴、何者も恐れず振舞う息子に、全ヴェーダを教えた後、(次のことを) 説いた⁵。
- (3) 息子よ、ダルマを行え。常に感官を制御して、厳しい寒さと暑さ、飢えと渴き、そして風に⁶打ち勝つべし。
- (4) 真実 (satya)・正直・怒りなきこと・嫉妬なきこと・自制・苦行・不殺生・慈悲 (ānṛśaṃsya) を、規定通りに守るべし。
- (5) 真実の中に居よ。ダルマに喜び、あらゆる不正直を捨てて、神と客 (へのもてなし) の残余によって、命を維持せよ⁷。
- (6) 身体は、泡の器のごとくであり⁸、命我 (jīva) は (木にとまっている) 鳥のごとくに (身体に) とどまっているにすぎず、愛する者との同居は長くない。それなのに、どうしてお前は眠るのか、息子よ。
- (7) 敵どもは、正気であり、目覚めており、常に注意深く、機会を捉えようと願っているのに、愚かなお前は気がつかないのである。
- (8) 年々は重なっていき⁹、そして寿命は減している時、命 (jīvita) は残り少なくなっているのに、どうしてお前は立ち上がって走らないのか¹⁰。
- (9) 極めて不信心の者たちは (bhr̥śa-nāstikāḥ)、彼方の世界において為すべきことなどには関心なく (prasuptāḥ)、この世での肉と血の増大を望むのである。
- (10) 認識の迷妄 (buddhi-moha) を伴い、ダルマに対して不満をもつ人々は、道を外れる。(道を外れて) 進む彼らの後に従う者もまた苦しむのである。

vaktum arhasi kauravya devasyājasya yā kṛtiḥ // (クル族の長老よ、未生の神の御業とは何か、お話し下さい。)

Cn., Cp. は、avyakta と vyakta と tattva、というように全体を dvandva に解釈している。ただしこれらの語が意味する内容については異なった解釈を示している。

⁴P., B.: prākṛtena suvṛttena K. prākṛtenaiva vṛttena Cp. prākṛtena sarvalokasādhārāṇena / (prākṛtena とは、全世界に共通する、という意味である)

⁵adhyāpya kṛtsnam svādhyāyam anvaśād Cn. svādhyāyam pitṛpitāmahapraṇṇayā parigṛhitam vedabhāgam adhyāpya, śabdato 'rthataś ca grāhayitvā, tatṛānadhigatān śākhāntariyān arthān anvaśāt, anuśāsitaṇ / (svādhyāyam, すなわち、父・祖父の相承によって受持されたヴェーダの四分の一を、adhyāpya, すなわち、言葉と意味から理解させた後、そこで学ばれなかった他の支分のもろもろの事柄を、anvaśāt, すなわち、教示した、という意味である)

B., K. は次節の間に vyāsa uvāca を補っている。

⁶vāyum 中村 [2000]: 風災に (p.824, v.4) この章の第 36 詩節に「ヤマ神の前を行く風があらゆる方向に吹く」という表現がある。

⁷P. yātrām prāṇasya saṃśraya B. mātrām prāṇasya saṃliha K. yātrām prāṇasya saṃliha Cs.: prāṇa-yātrārtham kiṃcid aśānety arthaḥ / (命の維持のために、少量を食べるべし、という意味である)

⁸P. phenapātropame B., K.: phenamātropame Cf. Hopkins[Great Epic]: a metaphor, foam-like body and bird-like soul, p.161, fn.1.

⁹P. ganyamāneṣu varṣeṣu B., K.: ahaṣu ganyamāneṣu

¹⁰kim utthāya na dhāvasi N. na dhāvasi, devaṃ gurum vā śaraṇam na yāsi / (na dhāvasi とは、神あるいは師匠に保護を求めないのか、という意味である)

- (11) しかし一方、満足し、よく制御し、真実の伝承に専心し¹¹、ダルマにかなった道を登る人たちがいる。汝は彼らを敬うべし。そして彼らに尋ねるがよい。
- (12) ダルマの見者である彼ら長老たちの¹²考えを身につけ、すぐれた認識 (parayā buddhyā) によって間違った道を行く心を (cittam utpathagāmi) 制御すべし。
- (13) 意識の散乱した者たちは (vicetasah), 今日という時に向けられた認識のために¹³、明日は遠いと考え¹⁴、恐れをもたず、すべてを楽しみ¹⁵、行為の (結果である) 世界を¹⁶見ることはない。
- (14) ダルマの梯子をたてて、少しづつ少しづつ登るべし。お前は、蚕のように¹⁷自分を閉じ込めているのに (veṣṭayan), 気がついていない。
- (15) 尊敬の念なく (bhinnamaryādam), 池に落ちるかのごとく¹⁸不安定で、(高い) 竹のごとく高慢である、信仰なき (nāstikam) 者は、恐れることなく (visrabdhaḥ) 左側に置くべし¹⁹。
- (16) 汝は、愛欲・怒り・死を²⁰、そして五感を水とする川を、誕生というもろもろの難路を、堅忍よりなる船を²¹作って渡るべし。
- (17) もろもろの空でないものが過ぎ去っていく時²²、死によって襲われ、老いによって苦しめられている世間を (loke) 、ダルマという乗物によって²³渡るべし。 (Cf.MBh.XII.169.8)

¹¹P. tuṣṭāḥ suniyatāḥ satyāgamaparāyaṇāḥ B.,K.: tuṣṭāḥ śrutiparā mahātmāno mahābalāḥ

¹²P. vṛddhānām B.,K.: budhānām v-b の変化か。

¹³P. adyakālikayā buddhyā B.,K.: ādyakālikayā buddhyā Cn. ādyakālikayā, vartamānamātradarśinyā / (ādyakālikayā とは、現在のみを見るものである、という意味である)

¹⁴dūre śva iti śva iti padena paralokaṃ lakṣayati, tena paraloko bhavati vā na veti samdigdhaḥ / (śvaḥ という言葉によって、来世を述べている。これによって、来世は存在するのか、あるいは存在しないのか、という疑問が生じる)

¹⁵P. sarvabhakṣā B.,K.: sarvabhakṣyā Cs. sarvabhakṣāḥ purārjitapūṇyaphalasya niravaśeṣeṇa bhakṣāḥ / (sarvabhakṣāḥ とは、これまでに獲得した善業の果報を残りなく享受する、という意味である)

¹⁶karmabhūmim Cp. karmabhūmim, narakam / (karmabhūmim とは、地獄を、という意味である)

¹⁷koṣakāravat Cs. koṣakāravat, yathā peśaskārī jantur ātmānam madhye nidhāya parito mṛd ālipya tato nirgantum aśaktas tatraiva mriyate ity arthaḥ / (koṣakāravat とは、例えば、神像を作る人が、自分を中に置いて、廻り中に泥を塗って、そこから外に出られなくなって、まさしくそこで死ぬ、という意味である)

¹⁸P. kūlapātam ivāsthīram B.,K.: kūlapātam iva sthitam Cn. kūlapātam, mahānadīpūram / (kūlapātam とは、満水の大河に、という意味である) Cp. anarthāvaham / (不利益をもたらす、という意味である)

¹⁹vāmataḥ kuru Ca. vāmataḥ kuru, tyaja iti lokoktiḥ / (vāmataḥ kuru とは、捨てよ、という意味の言い習わしである) Cs. vāmataḥ kuru pratikūlapakṣe / (vāmataḥ とは、反対の側に、kuru 置け、という意味である)

²⁰P.,B.: kāmam krodham ca mṛtyum ca K. kāmakrodhagrāhavatīm

²¹nāvaṃ dhṛtimayīm Cn. dhṛtiḥ, prāṇādivedagdhāraṇam, yoga ity arthaḥ / (dhṛtiḥ とは、プラーナなどの勢力を保持すること、すなわち、ヨーガである、という意味である) Cf.Hara[2010]: the raft of dhṛti, pp.139, fn.52, 140, fn.58.

²²amoghāsu patantiṣu Cn. amoghāsv āyurharaṇena saphalāsu rātriṣu / (amoghāsu とは、寿命を奪うに効力のある夜たちが、という意味である) Cs. patantiṣu, mṛtyusenāsv ity arthaḥ / (patantiṣu とは、死の軍勢でもが、という意味である)

²³P.,K.: dharmayānena B. dharmapotena N. dharmapotena dharmanaukayā / (dharmapotena とは、ダルマの舟によって、という意味である) Cf.Hara[2010]: carriage of dharma, p.139, fn.52.

- (18) 死は、立っている者も、横になっている者も狙っている時、汝は、どうして安息を得られようか。汝は、理由なく死によって食べられるのである。(Cf.Hara[2010]: Mṛtyu's mercilessness, p.107.20)
- (19) 死は、もろもろの欲望に満足することなく富の蓄積のみに意を注ぐ者を²⁴、牝狼が羊を襲って(奪い去る)がごとく、奪って去るのである。(Cf.MBh.XII.169.18, 317.24; Hara[2010]: Mṛtyu's mercilessness, p.107.23, 137, fn.29)
- (20) (汝が) 暗闇に入れねばならない時には²⁵ 少しづつ蓄積された炎をもち、ダルマの認識からなる大きな灯火 (dīpa) を、力を尽くして掲げるべし。
- (21) この人間の世界で、何度も (kadācit) 身体の網 (deha-jālāni) に落ちつつ、人はバラモンたることを得る。息子よ、それ (身体) を守るべし。
- (22) なぜならば、バラモンにとってこの身体は愛欲のために生じるのではない。この世での苦しみ (kleśa) のため、苦行のため (に生じるの) である。しかし死後には比類なき安楽がある。
- (23) バラモンたることは、多くの苦行によって達成される。それを得たならば、賭事によって軽率に振舞うべきではない²⁶。ヴェーダ学習、苦行、自制に常に専念し、平安を求め、善行を専らとして、常に制御すべし。(韻律: Praharṣiṇī²⁷)
- (24) 人生という馬 (vayohaya)、それは未顕現を素質とし (avyaktaprakṛti)、微粒子を身体とし²⁸、微細な本性をもつが、人々にとっては、そのような人生の馬が、瞬時 (kṣaṇa) と寸時 (truṭi) ごとに、瞬間 (nimeṣa) を体毛とし²⁹、季節を口とし³⁰、月が満ちる半月と欠ける半月を力等しい目とし、一月(māsa) ^{ひとつき}を手足として、走る (ようなも) のである。(韻律: Praharṣiṇī³¹)
- (25) それ (人生の馬) が、疲れることなく前進し、恐ろしい勢いで走り、常にこの世で

²⁴saṃcinvānakam Cn. saṃcinvānakam, dhanādīsaṃcayaparam / (saṃcinvānakam とは、財産などの蓄積を専らとする者を、という意味である)

²⁵P.,K.: andhakāre praveṣṭavye B. andhakāre praveṣṭavyam Cn. andhakāre, saṃsāre / (andhakāre とは、輪廻に、という意味である) Cp. andhakāraṃ, narakalakṣaṇam / (andhakāraṃ とは、地獄の特徴をもつものに、という意味である)

²⁶P. na paripaṇena hēḍitavyam B.,K.: na ratipareṇa helitavyam

²⁷b,d 句は、最後の音節が短音 (b: hēḍitavyam; d: yatasva)。Cf.Hopkins[Great Epic]: twelve cases of *praharṣiṇī*, all regular (but the first hemistich as well as the second may end in brevis), p.330.12)

²⁸kalāśarīraḥ Hopkins[Great Epic]: body of particles, p.154.10

²⁹P.,B.: kṣaṇatruṭiśo nimeṣaromā K. kṣaṇatruṭikā nimeṣaromā Cp. truṭiśaḥ, iti śaḥpratyayaḥ svārthe / (truṭiśaḥ という語においては、śas という接尾辞は、(接尾辞としての) 語本来の意味で用いられている) Ganguli: Kshanas, and Trutis, and Nimeshas are the hair on its body. (p.74.27) Duessen: mit Sekunden und Terzen bestehenden Augenblicken als Haaren (p.694, v.25) Cf.Hopkins[1903]: *nimeṣa*, wink, as “hairs of Time”, p.11.11.

³⁰P. ṛtvāsyah B. saṃvāsyah K. yān etat

³¹b 句は第 5 音節が長音 (*kṣaṇatruṭiśo*)。ここを短音で読む写本もある。

は顧みないのを見て、もし汝の目が³²他の案内人によって導かれる必要がなければ³³、
汝の心をダルマにおき、最高者を³⁴見るべし。(韻律: Praharṣiṇī³⁵)

(26) しかし、これらの、ダルマと愛欲の振舞いにおいて混乱し、いつも嘆き³⁶、望ま
しくないものと結びつく者たちは、苦痛からなる身体を得て³⁷、多くのアダルマ(の行
為)の潜在力によって³⁸ひどく苦しむのである。(韻律: Praharṣiṇī)

(27) 常にダルマに専心する王は、善行の保護者であり³⁹、もろもろの善行の世界を見て、
(それらの世界を)獲得する(dadhāti)。(彼は)種々に振舞う人々に対して(carataḥ)、得
難く⁴⁰非難しがたい安楽を示すのである⁴¹。(韻律: Mātrāchandas⁴²)

(28) 恐ろしい犬どもや、鉄の嘴をした鳥どもが⁴³、そして、ヴァダ・ハゲワシー族の鳥
の⁴⁴集合が、そして人々を殺す際に血を飲む者どもが、師匠の言葉を否定する死者を
攻撃するのである⁴⁵。(韻律: Mātrāchandas⁴⁶)

³²cakṣus Ca.,Cn.: cakṣuḥ, jñānam / (cakṣuḥ とは、知識が、という意味である)

³³yadi na parapraneṭṭneyaṃ Ca. parapraneṭṭneyaṃ, indriyādyanadhīnam / (parapraneṭṭneyaṃ とは、感官など
に依存せずに、という意味である) Cn. andhavad yadi na bhavasīty arthaḥ / (もし汝が盲人のごとくでなければ、と
いう意味である)

³⁴param Cn. param, paralokam ātmānam vā / (param とは、来世を、あるいはアートマンを、という意味である)

³⁵b,d 句は、最後の音節が短音 (b: -pekṣamānam, d: niśamya)。この点については第 23 詩節の注 (Hopkins[Great
Epic], p.330.12) 参照。

³⁶krośantaḥ Ganguli: always display malice towards others (p.74.35)

³⁷parigatavedanāśarīrā(h) Cn. parigataṃ, prāptaṃ, yamaloke / (parigataṃ とは、すなわち、獲得した、ヤマの
世界において(獲得した)、という意味である)

³⁸P. adharmavāsanābhīḥ B. adharmakāraṇābhīḥ K. adharmavāgūrābhīḥ

³⁹P. śubhagoptā B.,K.: śubhāśubhasya goptā

⁴⁰anupagataṃ Cn. anupagataṃ, nānāyonisahasreṣv aprāptaṃ / (anupagataṃ とは、何千という様々の母胎に
おいて到達できない、という意味である)

⁴¹P. carataḥ pradiśati sukham B.,K.: carati praviśati sukham

⁴²a 句: rājā dharmaparaḥ sadā śubhagoptā / (____ _ _ _ _) (19 morae, Hopkins[Great Epic]:
20 morae, rājā sadā dharmaparaḥ śubhāśubhasya, p.351.21) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

b 句: samīkṣya sukrīnāṃ dadhāti lokān (_ _ _ _ _) (17 morae, Hopkins[Great Epic]: 21
morae, goptā samīkṣya sukrīnāṃ dadhāti lokān, p.351.22) (opening: Udīcyavṛtti, cadence: Aupacchandasaka)

c 句: bahuvīdam api carataḥ pradiśati (_ _ _ _ _) (14 morae, B.reads: bahuvīdam api
carati praviśati) (opening: Vaitāliya, cadence: irregular)

d 句: sukham anupagataṃ niravadyam / _ _ _ _ _ (13 morae, Hopkins[Great Epic]: 14
morae, by taking the last syllable as long (niravadyam, p.351.24) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

Cf. Hopkins[Great Epic]: mātṛa-formation, 20 + 21 + 14 + 14 morae, p.351.25.

⁴³P. śvāno bhīṣaṇāyomukhāni B.,K.: śvāno bhīṣaṇakāyā ayomukhāni Sandhi irregular: bhīṣaṇāyomukhāni
Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8 Double sandhi, 1.8.7 -ā < / -ās a-/, p.43.12)

⁴⁴P. vaḍagrḍhrakulapakṣiṇāṃ B. balagrḍhra(kurara)pakṣiṇāṃ K. balagrḍhrakulalakpakṣiṇāṃ

⁴⁵P. viśasanti B.,K.: viśanty asantaḥ

⁴⁶a 句: śvāno bhīṣaṇāyomukhāni vayāmsi (____ _ _ _ _) (19 morae, Hopkins[Great Epic]:
19 morae, śvāno bhīṣaṇakāyā ayomukhāni, p.351.29) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

b 句: vaḍagrḍhrakulapakṣiṇāṃ ca saṃghāḥ / (_ _ _ _ _) (17 morae, Hopkins[Great Epic]:
19 morae, vayāmsi balagrḍhra[kura]pakṣiṇāṃ ca saṃghāḥ /) (opening: Vaitāliya, cadence: Aupacchandasaka)

c 句: narāṃ kadane rudhirapā guruvacana- (_ _ _ _ _) (17 morae, Hopkins[Great Epic]:
15 morae, narakadane rudhirapā guruvaca-, p.351.30) (opening: Udīcyavṛtti, cadence: irregular)

d 句: nudam uparaṃ viśasanti / (_ _ _ _ _) (12 morae, Hopkins[Great Epic]: 16 morae,
nanudam uparataṃ viśanty asantaḥ, p.351.31) (opening: irregular, cadence: Āpātakikā)

Cf. Hopkins[Great Epic]: mātṛa-formation, 19 + 19 + 15 + 16 morae, p.351.28

- (29) これら、この世で自存者 (svayaṃbhu) によって定められた、十の要素からなる⁴⁷規範 (maryādā) を、心にかなうからといって (manonugatvāt) 破る悪人は、祖霊の世界 (刀の葉の) 森に深く入って、ひどく苦しい状態で (bhr̥śam asukham) 住むのである。(韻律: Mātrāchandas⁴⁸)
- (30) きわめて貪欲で、友人に不誠実であり (priyāṇṛta), 不正直・偽り・不満を常とし、もろもろの詐欺によって危害を加える⁴⁹者、そのような悪行をなす者は、最悪の地獄に趣き、ひどく不幸な状態を (bhr̥śam asukham) 経験するのである。(Cf. Strauss[1912]: p.209(17)). (韻律: Mātrāchandas⁵⁰)
- (31) (そのような者は) 熱い大河ヴァイタラニー川で溺れ、刀の葉の森で体を刻まれ、斧の森に横たわり、大地獄に落ちて、大きな苦痛とともに住むのである。(Cf. Strauss[1912]: p.209(17)). (韻律: Mātrāchandas⁵¹)

(32) 汝は、もろもろの偉大な世界を (見たと) 自慢するが⁵², しかし最高 (の世界) を

⁴⁷daśaguṇā(h) Ca. daśaguṇāḥ, ahimsādayaḥ eva / (daśaguṇāḥとは、不殺生などである) Cn. daśaguṇāḥ, daśavidhāḥ / śaucasantoṣatapahsvadhyāyeśvarapraṇidhānāni pañca vidhirūpāḥ / ahimsāsatyāsteyabrahmacaryāparigrahākhyā niṣedharūpāś ca pañca / (daśaguṇāḥとは、十種の、という意味である。清浄・満足・苦行・ヴェーダ学習・自在者への帰依が教令を本質とする五種、不殺生・真実・正直・梵行・不所有が禁止を本質とする五種である)

⁴⁸a 句: maryādā niyatāḥ svayaṃbhuvā ya ihemāḥ (____ _ _ _ _) (22 morae, =B.) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

b 句: prabhinatti daśaguṇā manonugatvāt / (____ _ _ _ _) (18 morae, =B.) (opening: Vaitāliya, cadence: Aupacchandasā)

c 句: nivasati bhr̥śam asukham pitṛviśaya- (____ _ _ _ _) (15 morae, Hopkins[Great Epic]: 14 morae, by the reading: nivasati bhr̥śam asukham pitṛviśa-, p.352.3) (opening: Vaitāliya, cadence: irregular)

d 句: vipinam avagāhya sa pāpāḥ / (____ _ _ _ _) (13 morae, Hopkins[Great Epic]: 14 morae, by the reading of B.: ya-vipinam avagāhya sa pāpāḥ, p.352.4)(opening: irregular(Hopkins に従えば Vaitāliya), cadence: Āpātakikā)

Cf. Hopkins[Great Epic]: of mātṛa-formation, 22 + 18 + 14 + 14 morae, p.352.9.

⁴⁹upanidhibhir asukhakṛt N. upanidhibhiś chalena / (upanidhibhiśとは、もろもろの詐欺によって、という意味である)

⁵⁰a 句: yo lubdhaḥ subhr̥śam priyāṇṛtaś ca manuṣayaḥ (____ _ _ _ _) (22 morae, =B.) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

b 句: satatanikṛtīvañcanāratīḥ syāt / (____ _ _ _ _) (16 morae, Hopkins[Great Epic]: 17 morae, by the reading of B.: satatanikṛtīvañcanābhiratīḥ syāt /, p.352.11) (opening: Vaitāliya, cadence: Aupacchandāsaka)

c 句: upanidhibhir asukhakṛt sa paramanirayago (____ _ _ _ _) (19 morae, =B.) (opening: Vaitāliya, cadence: irregular)

d 句: bhr̥śam asukham anubhavati duṣkṛtakarmā / (____ _ _ _ _) (18 morae, =B.) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātakikā)

Cf. Hopkins[Great Epic]: mātṛa-formation, 22 + 17 + 19 + 18 morae, p.352.18

⁵¹a 句: uṣ, āṃ vaitaraṇīm mahānadīm avagādho (____ _ _ _ _) (22 morae) (opening: Vaitāliya, cadence: Āpātalikā)

b 句: 'sipatravanabhinnagātrah / ____ _ _ _ _ (13 morae) (opening: Udīcyavṛtti, cadence: irregular)

c 句: paraśuvanaśayo nipatito vasati (____ _ _ _ _) (16 morae)(opening: Vaitāliya, cadence: irregular)

d 句: ca mahāniraye bhr̥śartah / (____ _ _ _ _) (13 morae) (opening: Vaitāliya, cadence: irregular)

Cf. Hopkins[Great Epic]: mātṛa-formation, 22(19) + 13 + 16 + 13 morae, p.352.30

⁵²mahāpadāni katthase Ca. mahāpadāni, mahānti svargādīni padāni, sthānāni / (mahāpadāni とは, mahānti, すなわち、天界などの, padāni, すなわち、もろもろの場所を、という意味である) Cn. brahmādīnām sthānāni / (mahāpadāni とは、ブラフマンなどのもろもろの世界を、という意味である)

(param) 見てはいない。汝は、死の行為が未だやって来ないので、それに久しく気がつかないているのである⁵³。(Cf.Hopkins[Great Epic]: the continuous iambic śloka, over six hundred successive iambs occur in xii.322.33-71(=XII.309.32-70), p.238.10)

- (33) 努力せよ。なぜ座しているのか。大きな恐れが近づいている。破滅的で恐ろしい恐れが。安楽に心を留めよ⁵⁴。
- (34) まもなく⁵⁵、ヤマ神の死の命令によって、汝は死に、連れて行かれるであろう⁵⁶。それが近いために⁵⁷、もろもろの激しい(苦行)によって⁵⁸、真摯に (ārjave) 努力すべし。
- (35) 威力あるヤマ神は、(人々の) 苦しみを知らず、すべての親戚を、そして汝のこの世での命 (jīvita) も、すぐに連れ去るであろう。ヤマ神を妨げる者はいないのである。
- (36) ヤマ神の前を行く風が、まもなく、あらゆる方向に吹くであろう。まもなく汝は一人で連れて行かれるのである。死に備えよ。
- (37) 死の風は、しゃっくりのような音を発して⁵⁹、まもなく汝に吹くであろう。やがて大きな恐怖が到来すると、もろもろの方位は汝のまわりを (te) 廻るであろう。
- (38) 汝が混乱に至れば、やがて汝のこの世での記憶は⁶⁰消滅するであろう、息子よ。最高の瞑想を行え。
- (39) 為したことと為さざること、善と悪とを⁶¹、放逸な行為による悪徳であると、思念するならば (smaran), やがて汝は苦しまないであろう。唯一の宝 (nidhi) に心を向けよ (nidhatsva)。
- (40) やがて老いは、体力と四肢の美しい形を奪い去り、汝の体を衰えさせるであろう。唯一の宝に心を向けよ。
- (41) やがて死は、もろもろの病の剣によって⁶²、身体を切り裂くであろう。命は必ず (prasahya) 滅するのであるから、大苦行を行え。

⁵³ cīrasya mṛtyukārikām anāgatām na budhyase Ca. kārikām, kriyām, yātanām / (kārikāmとは、すなわち、行為に、すなわち、刑罰に、という意味である) Cn. mṛtyukārikām, jarām (mṛtyukārikāmとは、老いに、という意味である) Ca. anāgatām, pratyakṣam uparisthitām / (anāgatāmとは、明らかに後で起こる、という意味である) Ganguli: cīrasya, meaning that thou art always blind etc, p.75, fn.5.

⁵⁴ sukhasya saṃvidhīyatām Ca. sukhasya saṃvidhīyatām, mokṣārthaṃ prayatyatām / (sukhasya saṃvidhīyatāmとは、解脱のために努力せよ、という意味である)

⁵⁵ purā Cf.Hopkins[1902-2]: purā, future (as well as past), p.351.33; Oberlies[Grammar]: future expressed by the present tense with purā, p.150.2.

⁵⁶ P. praṇīyase yamasya mṛtyuśāsanāt B. praṇīyate yamasya rājaśāsanāt K. praṇīyase yamasya rājaśāsanāt

⁵⁷ P. tadantikāya B.,K.: tvam antakāya

⁵⁸ dāruṇaiḥ N. dāruṇaiḥ, kṛcchrāditapobhiḥ / (dāruṇaiḥ, すなわち、身体的苦痛などの苦行によって)

⁵⁹ P. sahikā eva B. sa hi kva K. sa eka eva

⁶⁰ P. smṛtiś ca B.,K.: śrutiś ca

⁶¹ P. kṛtākṛte śubhāśubhe B.,K.: śubhāśubhe purā kṛte

⁶² P.,K.: rogasāyakaiḥ B. rogasārathiḥ

- (42) やがて、人間の体を住処とする恐ろしい狼どもが⁶³、あらゆる方向から襲いかかるであろう。善の修習に専念せよ。
- (43) やがて汝は、たった一人で暗闇を見るであろう。急げ。やがて汝は、山の頂に黄金からなる木々を⁶⁴見るであろう。
- (44) やがて汝の悪友どもや友人の顔をした敵どもが、汝を(正しい)見解から (darśanāt) 逸らせるであろう。最高のものを (yat param) 求めて努力せよ、息子よ。
- (45) 王からの、そして泥棒からの恐れのない財産、そして死も引き離さない財産、そのような財産を得よ。
- (46) そこ(死後の世界)では、(財産は)もろもろの自分の行為から互いに離されることはない。その人に属する財産だけを、人はそこ(死後の世界)で得るのである⁶⁵。
(Cf.Mbh.XII.309.57; Strauss[1912]: Keiner von seinen Werken getrennt, p.204(12).4)
- (47) 来世でそれによって生きるもの、息子よ、汝はそれこそが(この世で)与えられるべきである⁶⁶。汝は、不滅にして永遠の財産、それを自分で獲得すべし。
- (48) 裕福な人の麦菓子^{なま}が焼けない間に、すなわち麦菓子が生の時に⁶⁷、すぐにも汝は連れて行かれるのである。急げ。
- (49) 母も父も親戚も、親しいよき人も、ただ一人狭い道を行く汝に⁶⁸従い行くことはない。
- (50) 自ら為した善悪の行為のみが、あの世に行く者の財産である⁶⁹。
- (51) 善悪(の行為)によって集められた黄金と宝石の集積は、その人の身体が滅する時に、目的を達成する手段ではない。
- (52) あの世に行く汝にとって⁷⁰、為したあるいは為さざる行為の⁷¹証人としては、この世の人々の中では、自分に匹敵する者はいない⁷²。

⁶³vr̥kā Cn. vr̥kāḥ, kāmadaḥ / (vr̥kāḥとは、愛欲などが、という意味である)

⁶⁴hiraṇyān nagān Ca. hiraṇmayavr̥kṣadarśanam upasthitamarāṇasyāriṣṭaṃ tattvam / (黄金からなる木を見ることは、死の近づいた兆候である) N. hiraṇmayavr̥kṣadarśanam maraṇacihnam / (黄金からなる木を見ることは、死の前兆である) Cf.Hopkins[1910]: trees of gold, maraṇacihna, p.351.fn.2.

⁶⁵yad eva yasya yautakam tad eva tatra so 'śnute Ca.,Cn.: yautakam, vivāhāptaṃ dhanam, dāyādāsādhāraṇam (Cn. dāyādāgrāhyam) / (yautakam とは、婚姻によって得られるもの、財宝、相続人に属さないもの (Cn. 相続人によって取られないもの) である)

⁶⁶P.,B.: dīyatām K. cīyatām

⁶⁷apakva eva yāvake Cn. yāvake ghr̥takhaṇḍamiśre yavapiṣṭavikāre / (yāvake とは、酪油と砂糖のまざった大麦の粉の産物(vikāra)が、という意味である)

⁶⁸saṃkaṭe vrajantam ekapātinam Ca. ekapātinam, asahāyagāminam / (ekapātinam とは、同伴者なく行く者に、という意味である) Cp. ekākinam gacchantam / (一人で行く者に、という意味である)

⁶⁹P. tasya yautakam bhavaty B. putra sārthikam bhavaty K. putra yautakam bhavaty

⁷⁰P.,B.: paratragāmikasya te K. na putra śāntir asti te

⁷¹kṛtākṛtasya karmaṇaḥ Cs. kṛtākṛtasya, bhogārtham kṛtasya, kariṣyamāṇasya ca / (kṛtākṛtasya とは、享受のために、行った、そして、行おうであろう(行為の)、という意味である)

⁷²P. na sākṣir ātmanā samo B. na sākṣi ātmanā samo K. na sākṣiko 'tmanā samo Cn. sākṣi ātmaneti, iko

- (53) あの世に行ったならば、人間の身体は無となる⁷³。(身体を)知眼 (buddhicakṣu) によって見よ⁷⁴。なぜならば(知眼によって)完全に見られるからである。
- (54) この世では、火と太陽と風の三神は身体に住んでいる。、これらダルマの見者たちが、その (tasya) 証人である。
- (55) あらゆるものに触れ、あらゆるものを引き裂く、夜なき者たちの⁷⁵照明と暗闇 (gūḍha) の働きの中で、自分のダルマのみを守るべし。
- (56) 醜いルドラ神の眷族によって守られた⁷⁶多くの盗賊の中で⁷⁷、自分の行為を守るべし。自分の行為がそこに (tatra 冥界) 行くのである。
- (57) そこでは、自分の行為から互いに離れることはない。為された通りの、自分の行為から生じた結果、そののみを享受するのである。(Cf.Mbh.XII.309.46; Strauss[1912]: Keiner von seinen Werken getrennt, p.204(12).4)
- (58) アプサラスの群が、大仙たちと共に、果報として安楽を獲得するのと同様に、天上の車によって欲望のままに進む者たちは、行為によって(果報としての安楽を)獲得するのである。
- (59) 完成した自己を持つ罪なき人々によって為されたこの世での善行に応じて、(彼ら)清浄な母胎をもつ人々は(死後、果報を)獲得するのである。
- (60) 彼らは、家長期の義務の橋々を通して (gṛhasthadharmasetubhiḥ)、プラジャーパティ、ブリハस्पティ、インドラ神と世界を等しくする最高の道を行くのである。

⁷³savarṇe śākalyasya hrasvaś ca iti prakṛtibhāve hrasvaḥ / (śākṣi ātmanā とは、「シャーカリヤの見解では、iK で表される母音は、後に異なる母音がある場合、もとの形を保つ。そしてもし iK 母音が長母音であれば短母音になる」(Pāṇini 6.1.127) ということから、本来の形として短母音である) Cp. sāksir iti chāndasaṃ rūpam / (sāksir とは、ヴェーダの語形である) Cs. sarvabuddhisākṣiṇā paramātmānā samo nidhir nāsti / tasmāt so 'nveṣṭavyaḥ / (あらゆる英知による証人である最高我に等しい宝は存在しない。それ故それこそが追求されるべし) Cf.Oberlies[Grammar]: sāksī, Transfer of stem, 3.18 °i-stem ← °in-stem, p.94.7.

⁷⁴manuṣyadehaśūnyakam bhavaty amutra gacchataḥ Cn. amutra sāksīni gacchato liyamānasya kartur manuṣyadehasya śūnyam iva śūnyakam abhāvo bhavati / paradrṣṭyā sann api yogidrṣṭyā manuṣyadeho naṣṭo bhavaty arthaḥ / (amutra、すなわち、証人の中へと、gacchataḥ、すなわち、消滅しつつある行為者の、manuṣyadeśasya、すなわち、人間の身体は、śūnyakam、すなわち、無であるのかのごとく、すなわち、非存在として、bhavati 存在する。他人の見によつては存在していても、ヨーガ行者の見によつては人間の身体は滅している、という意味である) Cs. manuṣyadehaśūnyakam, gamanaṃ bhavatīti śeṣaḥ / (人間の身体が無へと進行している、と補われるべきである)

⁷⁵P. prapaśya B.,K.: praviśya N. (praviśya) hārdākāśam iti śeṣaḥ / (心臓の虚空に(入って)、と補われるべきである)

⁷⁶P. yathāniśeṣu B.,K.: aharniśeṣu Cs. tathāniśeṣv iti / niśā na vidyate yeṣāṃ tāny anisāni, indriyāṇi / (tathāniśeṣv とは、それらにとって夜が存在しない者たち、それが anisāni であり、感官たちである)

⁷⁷P. virūparaudrarakṣite B.,K.: virūparaudramakṣike Cs. virūḍharaudrarakṣite, virūḍāḥ ye dṛḍhabhūmayāḥ ye raudrāḥ kāmakrodhādayaḥ, taiḥ pālita asmin dehe ity arthaḥ / (virūḍāḥとは、すなわち固い基盤を持つ者たちである。それらが raudrāḥであり、愛欲と怒りなどである。それらによって守られた身体において、という意味である)

⁷⁸anekapāripanthike Cn. aneke paripanthinaḥ śatravo lohatuṇḍāḥ pakṣivṛkādāyo yasmin / (anekapāripanthinaḥとは、赤い嘴をした鳥や狼などの敵であり、その中で、という意味である) Cs. anekapa(pā)ripanthike, ādhyātmikādyanekopadravayukte / (anekapāripanthike とは、個人に関するものなど多くの不幸との結びつきの中で、という意味である)

- (61) 我々は、何千回となく多様に述べることができる。心の不惑 (abuddhimohanam) なくして、麦菓子 (のごとき天界) を得る力はない⁷⁸。
- (62) 青春は過ぎた⁷⁹。汝は、確固とした⁸⁰二十五才である。ダルマの蓄積を行うべし。なぜなら汝の若さ (vayas) は過ぎ去るのであるから。
- (63) 死はまもなく、放逸の鰐を調伏するであろう⁸¹。(死に) 掴まれたかのごとく立ち上がって (?)⁸²、ダルマの守護に急ぐべし。
- (64) 後方で、あるいは前方で、汝がただ一人行く時、このように道を⁸³行く汝にとって、自分が何になろうか。あるいはまた他人が (何になろうか)⁸⁴。
- (65) ただ一人であの世に行く良き人々には、一つの宝がある。もろもろの恐れの中で、有益な (sāmparāyikam) 大きな宝に心を向けよ。

(66) 威力ある者 (死) は、こだわりなく、家系の根源と友人ともども (?)⁸⁵連れ去る。彼

⁷⁸P. abuddhimohanam punaḥ prabhur vinā na yāvakaḥ B. abuddhimohanam punaḥ prabhur nināya pāvakaḥ K. abuddhimohanam punaḥ prabhur tu tena pāvakaḥ Ca. (reading -mohanāt) buddhimohavigamād vinā na yāvakaḥ, svāduḥbhakṣyam, iva svargaṃ prati prabhur, na sveṣṭalābhe prabhur ity arthaḥ / (心の混乱を回避すること, vinā なしには, yāvakaḥ, すなわち, 甘味, 食物, のごとき天界, に対して, prabhur, すなわち, 自分の望むものを獲得する力は, ない, という意味である) Cp. abuddhimohanam, buddhimohanam rasanam vinā yāvakaḥ surasabhaḥkṣyam iva prepsitam prati prabhur nāsti / asaṃmūḍhabuddhir eveṣṭalābhe prabhur ity arthaḥ / (abuddhimohanam とは, 心を惑乱させるもの, すなわち, 味覚, vinā, なしには, yāvakaḥ, すなわち, よい味覚の食物のごとく, 望ましいものに對して, prabhur, 能力は, ない。惑乱なき心をもつ者のみが, 望ましいものの獲得において能力がある, という意味である。) Cv. prabhur tu te na pāvaka ity atra abuddhimohanāt kāraṇāt pāvakaḥ nārakāgniḥ te prabhur na iti yojanā / (心の惑乱がない, という原因によって, pāvakaḥ, すなわち, 地獄の火は, te prabhur 汝を支配しない, という意味である。)

⁷⁹P. gatā dvir adṣṭavarṣatā B.,K.: gatā trir adṣṭavarṣatā / Ca. dvir aṣṭavarṣatā, tāruṇyam / (dvir aṣṭavarṣatā とは, 若さは, という意味である) (Cf. Hopkins[1902-2]: age, thrice eight years are gone, you are twenty-five, p.353.35)

⁸⁰dhruvo Ca. dhurvaḥ, pariniṣṭhitarūpaḥ / (dhurvaḥ とは, 精通した, という意味である)

⁸¹P. pramādagomukhāṃ damam B.,K.: pramādagomukhāṃ camūm Cn. (reading *pramādagomukhāṃ camūm*) pramādagah, pramādagrāhāṃ antaḥ / camūm, camati bhakṣyati camūr indriyasenā, tām amukhāṃ, antakavādiḥ svasvaviśayabhogahīnāṃ yāvāt karoti tatha puraiva / (pramādagah とは, 放逸の家に住む者, すなわち, 死である。camūm とは, camati 飲み, bhakṣyati 食べる故に, camūr 容器, 軍勢であるから, 感官の軍勢を, という意味であり, その amukhāṃ, すなわち, 致死性などの攻撃によるそれぞれの対象の享受の欠如を, ある期間, karoti, 行なって, その後, purā, まもなく, という意味である) Cp. (reading *pramādagomukhāṃ camūm*) pramādagomukhāṃ, pramādagocarāṃ pramādashāneṣu sodyamāṃ, camūm rogādirūpam / (pramādagomukhāṃ とは, 放逸を領域とした, すなわち, もろもろの放逸の場所において戦いの準備のできた, という意味であり, camūm とは, すなわち, 病気などの姿をした, という意味である)

⁸²P. yathāgrhītaṃ utthitaṃ B.,K.: yathāgrhītaṃ utthitaḥ Cp. grhītaḥ, keśeṣv ākrṣṭaḥ, svadharmapālāne utthitaḥ, udyuktaḥ / (grhītaḥ とは, 髪のところから引張られて, svadharmapālāne, 自分のダルマの守護に, utthitaḥ, すなわち, 熱心な, という意味である)

⁸³gatiṃ Cn. gatiṃ, ātmajñānarūpam / (gatiṃ とは, アートマンの知識という性質をもつ, という意味である)

⁸⁴kim ātmanā pareṇa vā Cn. ātmanā, dehena / pareṇa, tatsaṃbandhiputrādīnā / (ātmanā とは, 身体が, pareṇa とは, それに結びつく息子などが, という意味である) Cp. ātmanā, ātmīyena / pareṇa, udāsīnena / (ātmanā とは, 自分に属する親族が, pareṇa とは, 無関心な他人が, という意味である)

⁸⁵P.,B.: sakūlamūlabāndhavam K. satūlamūlabāndhavam Cn. sakūlamūlabāndhavam, bālavṛddhavyasyaiḥ sahitaṃ yathā syāt tathety arthaḥ / (sakūlamūlabāndhavam とは, 子供・老人・青年たちと共にいるかのように, という意味である) Cp. satūlamūlabāndhavam / tūlamūlyam, alpetaram / (satūlamūlam とは, 花の房と根からなる (?), 大きな, という意味である) Ganguli: The puissant Yama,, snatches away the friends and relatives of one's race by the very roots. (p.78.6) Deussen: Mit Erdreich, Wurzeln und Nachbarstämmen raft der Mächtige... (p.698, v.67) sakūlamūlabāndhavam と言うべきところを, 韻律 (vipulā) の要請から, a 句第 2 音節は長音の必要があり, kūla となったと解釈すれば, 「家系の根源と友人ともども」と Ganguli のように意味をとれる。

叙事詩の宗教哲学 (XXXX)

を妨げる者たちはいない。ダルマに近づくべし。

- (67) 私のこの教示に、今汝は同意するであろう、息子よ。自らの見解と推理に基づいて、この教えを実行せよ。
- (68) 自分の(ダルマの)行為によって誰かの財産を得る者は⁸⁶、百人のうち一人だけが⁸⁷、無知と惑乱から生じたもろもろの性質(guṇa)と結びつくのである。
- (69) もろもろの清浄な行為を行う汝には、聖典に説かれた力があるであろう⁸⁸。それこそが、そこでの教えである⁸⁹。それは、目的にかなった完成した知識である⁹⁰。
- (70) 村に住む者の歓喜は⁹¹、束縛する網である。行い善き人々はこれを切って進み、行い悪しき者たちはこれを切ることはない。(Cf.MBh.XII.169.24, 316.37; Śāṅkara's Bhāṣya on Brh.Upa. 4.5.15)
- (71) やがて死ぬ汝にとって財産が何になるう。親戚たちが、息子たちが何になるう、息子よ。洞窟に住むアートマンを望むべし。汝の祖父たちは皆どこへ行ったのか。(韻律: Triṣṭubh⁹²) (Cf.MBh.XII.169.36)
- (72) 明日為すべきことは、今日為すべし。午後為すべきことは午前⁹³に為すべし。今日誰に死の軍勢が向うか、誰が知ろう⁹⁴。(Cf.MBh.XII.169.14)
- (73) 親戚たちは、火葬地の端まで随行して、人を火に投げ入れた後、戻ってゆく。知人たちや友人たちも同様である。
- (74) 不信心な人々(nāstikān)、無慈悲な者たち、悪しき考えをもつ者たちを、ためらわずに左側に置け。怠りなく最高者を得ることを願うべし。

⁸⁶ P. dadhāti yaḥ svakarmaṇā dhanāni yasya kasyacit dadāti yaḥ svakarmanā dhanāni yasya kasyacit	B. dadhāti yaḥ svakarmaṇā dadāti yasya kasyacit dadāti yaḥ svakarmanā dhanāni yasya kasyacit	K.
--	---	----

⁸⁷P. śataika eva B.,K.: sa eka eva Sandhi irregular: *śataikaḥ* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8. Double *sandhi*, 1.8.15. *-ai < /-e e-/*, p.48.14.

⁸⁸P. śrutam samartham astu te B. śrutam samstam aśnute K. śubham samastam aśnute Cn. śrutam tattvam
asyādivākyajam jñānam kartṛ, samastam brahmāṇḍam aśnute, vyāpnoti / (śrutam, すなわち、真理、すなわち、その最初の言葉より生じた知識は (主格), samastam, すなわち、ブラフマンの卵を, aśnute, すなわち、満たす、という意味である)

⁸⁹P. tad eva tatra darśanam B.,K.: tad etad arthadarśanam tad は samartham , tatra はśrutam か。

⁹⁰kr̥tajñām arthasamhitam Cn. kr̥tajñām, kr̥tajñe upadiṣṭām, arthasamhitām puruṣārthasamgatām bhavati / (kr̥tajñām とは、完成した知識のために教示された、という意味であり、arthasamhitām とは、人の目的に合致している、という意味である)

⁹¹grāme vasato ratih Cf.Hopkins[1889]: *grāma*, p.77, fn.*.

⁹²Cf. Hopkins [Great Epic]: Catalectic Tristubh, a pāda dekasyllabic, p.283.28.

a 句: kim te dhanena kim bandhubhis te (_ _ _ _ _) (10syllables)

b 句: kim te putraih putraka yo marisyasi / () (12syllables)

c 句: 11 syllables, *Indravajrā* d 句: 11 syllables, *Upendravajrā*

⁹³pūrvāhne cāparāhnikam Cf.Hopkins[1903]: afternoon, a division of a day, p.16.24.

⁹⁴P. ko hi tad veda kasyādya mṛtyusenā nivekṣyate B.,K.: na hi pratīkṣate mṛtyuḥ kṛtaṃ vāsyā na va kṛtaṃ Cf.Hara[2010]: *mṛtyu-senā*, p.131.11.

- (75) このように世界が時によって襲われ、苦しめられている時、汝は、とりわけ大きな堅固さを保持して、全霊で (sarvātmanā) ダルマを行うべし。(Cf.MBh.XII.169.7; Uttarādhyāyanaśūtra 14.22ab)
- (76) そして、この見を得る方法 (darśana-upāya) を正しく知る者は、この世で正しくダルマを行った後⁹⁵、あの世で安楽を得るのである。
- (77) 「身体の分離において死はない」と知る者たちは、(先人たちによって) 善く守られた道において⁹⁶死ぬことはない。ダルマを増大させる者は賢者であり、ダルマから逸脱する者は迷うのである。(韻律: Vaṃśasthāvila⁹⁷)
- (78) 行為の道に従事する二人がいる時、(行為の) 実行者は、規範に従って、自分の行為の果報を獲得する。劣った行為をなす者は、地獄 (niraya) に落ち、ダルマに専念する者は、インドラ天の世界 (triviṣṭapa) に赴くのである。(韻律: Vaṃśasthāvila⁹⁸ (Cf. Strauss[1912]: dem Werktätigen der Himmel vorbehalten, p.209(17).13)
- (79) 天界への階段である得難き人間の状態に達したならば、そこから再び離れることのないように、自分を確立すべきである。
- (80) 天界への道に適合した考えをもち、(ダルマを) 逸脱しない人を⁹⁹、人々は善行の人と言った。彼は友人や親戚たちによって悲しまれることがない。
- (81) 心 (buddhi) が損なわれず、もろもろの確信を保っている人には、天界での場所が確約されているので、大きな恐れはない。
- (82) もろもろの苦行林に生まれ、そこで死んだ人々は、愛欲の享受を¹⁰⁰知らないのです、彼らのダルマはより小さい (alpataṛaḥ)。
- (83) しかし、もろもろの (愛欲の) 享受を捨てた後、身体を用いて苦行を行うならば、その人によって、達成されないものはない¹⁰¹。その果報を私は高く賛える (bahumatam)。
- (84) 何千という母と父、そして何百という息子と妻が、未来にいるであろうし、過去にもいた。彼らは誰のものか。我々は誰のものか。(Cf.MBh.XI.2.12, XII.28.38)¹⁰²

⁹⁵ P. sa dharmam kṛtvā B., K.: svadharmam kṛtvā

⁹⁶ svanupālīte pathi Cn. anupālīte, śiṣṭair ādṛte / (anupālīte とは、弟子たちによって崇拝された、という意味である) Cs. pūrvair ācarite / (先人たちが通った、という意味である)

⁹⁷ b, d 句: 最終音節が短音; c 句: 第一音節が長音 (=Indravamśā)。

⁹⁸ b 句: 最終音節が短音。

⁹⁹ yasya notkrāmati matiḥ Cn. notkrāmati, dharmam iti śeṣaḥ / (notkrāmati, ダルマを (逸脱しない), と補われるべきである)

¹⁰⁰ P. kāmabhogam B., K.: kāmabogān 「愛欲と享受」か。 Ganguli: enjoyments and the indulgence of desire (vol.X, p.79.22) Deussen: Luft und Genuß(p.700, v.83)

¹⁰¹ P. na tena kiṃcin na prāptam B., K.: na tena kiṃcin na prāptam Cf. Oberlies[Grammar]: na-compounds, 359.8.

¹⁰² この二つのパラレルは、c 句のみ相違している。この詩節の c 句 anāgatāny atītāni の代りに saṃsāreṣv anubhūtāni と読んでいる。

- (85) 彼らは汝によって為されるべきことはなく、汝にも彼らによって為されるべきことはない。彼らは自分の為したことどもと共に進んだ。汝もまた (汝の為したことどもと共に) 行くであろう¹⁰³。(Cf.Strauss[1912]: eine unübersteigbare Schranke zwischen den Individuen, p.203(11).26)
- (86) この世界では、富裕な人に対しては、他人も親戚のように振舞う¹⁰⁴。貧しい人々の親戚は、(貧しい人々が) 生きている時でも避けるのである (naśyati)。
- (87) 人は、妻のために悪しき行為を積み重ねる。そのためこの世でもあの世でも、苦しみ (kleśa) を得るのである。
- (88) 汝は見よ。生き物の世界は (jīvalokam)、自分の行為によって裂かれているのである¹⁰⁵。息子よ、(ここで) 教えられたことすべてを、そのままに実行すべし。
- (89) このように観察した後で、かの行為の地に (karmabhūmim) 入り、来世を願って、もろもろの善き行為を為すべきである。
- (90) 月・季節という名前によって回転し、夜と昼を薪とし、各自の行為にもとづく果報の観察者たる太陽という火によって¹⁰⁶、時 (kāla) は、必ず (prasahya) 生き物たちを焼くのである。(韻律: Upajāti)
- (91) 人が与えもせず獲得もしなければ、財産に何の意味があろうか。敵どもを防がなければ、力に何の意味があろうか。それによって人がダルマを行わなければ、天啓聖典に何の意味があろうか。感官を制御する力ある者でなければ、アートマンに何の意味があろうか。(韻律: Vamśasthāvila) (Cf.Hitopadeśa 2.9)
- (92) シュカは、このドヴァイパーヤナのよき言葉を聞いて、解脱を教えた父に別れを告げ、去った¹⁰⁷。

[310 章] (B.323 章, C.12158-12186, K.331 章) シュカの生涯 (2) シュカの誕生まで

ユディシュティラは言った。

¹⁰³P. のこの詩節の前に、B.,K. は次の詩節を挿入している。(=MBh.XII.788*)

aham eko na me kaścin nāham anyasya kasyacit /
na taṃ paśyāmi yasyāhaṃ tan na paśyāmi yo mama /

(私は、独りである。誰も私のものではなく、私は他の誰のものでもない。私がその人のものであるような人は見ないし、その人が私のものであるような人も見ない。)

¹⁰⁴P.,K.: paro 'pi svajānāyate B. svajānaḥ svajānāyate

¹⁰⁵P. chidrabhūtaṃ B.,K.: chīnabhūtaṃ

¹⁰⁶sūryāgninā rātridivendhanena Cf.Hopkins[1903]: the sun as fire, night and day as kindling-wood, p.15.2.

¹⁰⁷P. śuko gataḥ parityajya pitaraṃ mokṣadeśikam (B.,K.: mokṣadaiśikam) Ganguli: Suka, leaving his sire, proceeded to seek a preceptor that could teach him the religion of Emancipation (p.80.14)

B.,K. はこの詩節の前に bhīṣma uvāca を挿入している。

- (1) どのようにしてヴィヤーサ仙に、法を尊び、大苦行を行うシュカは生まれ、そして、最高の完成 (siddhi) に達したのですか、祖父よ、それを私にお話し下さい。
- (2) そして苦行に富むヴィヤーサ仙は、どの女性にシュカを誕生させたのですか。というのも我々は彼の母を、そしてこの偉大な者の卓越した (agryam) 誕生を知らないのです¹⁰⁸
- (3) そして、どのようにして、子供であるにもかかわらず、彼の考えは微妙な認識に (sūkṣma-jñāne) 至ったのですか。この世界で、他の誰も二番目の者として達することのできないような (微妙な認識に)。
- (4) これを私は詳しく知りたいのです、大きな光輝をもつ方よ。実に私は、ここで最高の甘露 (のごとき言葉) を聞く時には、飽きることはありません。
- (5) そして、シュカの大威徳 (māhātmyam)、アートマンとの合一 (ātmayogam)、そして認識 (vijñānam) を、ありのままに順序正しく、祖父よ、私にお話し下さい。

ビーシュマは言った。

- (6) 年齢、白髪、財産、親族たちによって (偉大であるの) ではない。聖仙たちは、ヴェーダとその支分に通曉せる者が¹⁰⁹我々にとって偉大な者である、という基準 (dharma) を作った。(Cf.MBh.III.133.13, Manu 2.154)
- (7) 汝が私に尋ねることはすべて、苦行を根本としている、パーンドウ王の子よ。その苦行は、もろもろの感官を制御した後 (saṃnyamya)、生じるのであって、それ以外の仕方ではない。
- (8) 人は、もろもろの感官に耽溺するために誤りに至る。このことは疑いない。それらを制御した後 (saṃnyamya)、人は完成に達するのである。
- (9) 千回のアシュヴァメーダ祭の、そして百回のヴァーージャペーヤ祭の果報も、わずかの¹¹⁰ヨーガの果報に匹敵しないのである、親愛なる者よ。
- (10) ここで私は、誕生というヨーガの果報 (janma-yoga-phalam) をありのままに、そして、未熟な者たちには認識するのが難しいシュカの境地を (gatim)、汝に語るであろう。
- (11) 実に、かつて (purā) カルニカーラ樹の森のあるメール山の山頂で¹¹¹、偉大な神 (シヴァ) は恐ろしい妖怪たちの群に囲まれて散歩していた。

¹⁰⁸P.,B.: vidma K. vidmo Cf.Oberlies[Grammar]: vidma, 6.3 The verbal endings, 6.3.1.2 -ma instead of -mah, p.171.10.

¹⁰⁹anūcānaḥ Ca. anūcānaḥ, gurumukhād adhītasāṅgavedaḥ / (anūcānaḥとは、師の口から、支分と共にヴェーダを学んだ者が、という意味である) Cs. ṣaḍaṅgavedādhyāyī pareṣām adhyāpakaś ca / (六支分とヴェーダを学び、他の者たちにとっては師である者が、という意味である)

¹¹⁰kalayā Cf.Hopkins[1902]: kalā, used alone, p.136.14.

¹¹¹meruśrṅge Cf.Hopkins[1910]: On its (Meru's) wooded top sit saints and gods, vv.11-21, p.366.34.

- (12) 山の王の娘である女神もまた、かつては (purā) そこにいた。威光あるクリシュナ・ドゥヴァイパーヤナは、その場所で神聖な苦行を行ったのである¹¹²。
- (13) 彼は、ヨーガの規定 (yoga-dharma) に専念し、ヨーガによって自身に入り¹¹³、(意識を) 集中しつつ、息子 (の獲得) のために苦行を行ったのである、クル族の最上の者よ。
- (14) 「火、地、水たち、風、そして虚空と力の等しい息子が私に生まれますように、卓越した神よ」と (祈った)。
- (15) そして彼は、最高の苦行に住して、未熟な者たちでは到達しがたい¹¹⁴この思惟 (saṃkalpa) によって¹¹⁵、神々の主に (息子の誕生を) 懇願した。
- (16) その威力ある者 (ヴィヤーサ) は、風を食べて実に百年の間立っていた。彼は、多くの姿をもちウマーの夫であるマハーデーヴァ (シヴァ) の恩寵を得ようとした。
- (17) すると、梵仙たち、あらゆる神仙たち、世界の守護者たち、そして、サーディヤたちが、ヴァスたちと共に、世界の支配者のところに (やって来た)。
- (18) アーディトヤ神群、ルドラ神群、太陽と月、マルト神群とその眷族¹¹⁶、海たち、そして川たちが、
- (19) アシュヴィン双神、デーヴァ・ガンダルヴァたち、ナーラダ仙とパルヴァタ仙、ガンダルヴァのヴィシュヴァーヴァス、シッダたち、そしてアプサラスたちの群が (やって来た)。
- (20) そこでマハーデーヴァは、ルドラとして、カルニカーラ樹の花でできた美しい花輪を身につけて輝いた。月が月光を身につけて (輝くか) のように。
- (21) 神々と神仙たちとに満ちた、その心地よき神聖な森において、聖仙 (ヴィヤーサ) は、息子の獲得のために熱心に、最高のヨーガを行った。
- (22) そして、彼の顔色は¹¹⁷衰えず、疲労は生じなかった。三界にとって、それは奇蹟のごとくであった (adbhutam ivābhavat)。
- (23) 無量の威力をもち、集中した彼の、あたかも太陽の光線のごとき弁髪は、熱によって燃え上がっているのが見られたということである。

¹¹²tapas tepe Cf. 原 [1979]: *tapas* with $\sqrt{\text{tap}}$, p.448.16.

¹¹³yogenātmānam āviśya Cn. yogenātmānam āviśya, antarhṛdaye indriyāṇi nirudhyety arthaḥ / (yogenātmānam āviśya とは、心臓の内部に、もろもろの感官を停止させて、という意味である)

¹¹⁴P. duṣprāpeṇākṛtātmabhiḥ B.,K.: duṣprāpam akṛtātmabhiḥ

¹¹⁵P. saṃkalpenātha so 'nena B. saṃkalpenātha yogena K. saṃkalpenātha maunena

¹¹⁶P. maruto mārutaś caiva B. vasavo marutaś caiva K. māruto marutaś caiva

¹¹⁷P. varṇo B.,K.: prāṇo

- (24) 尊者マールカンデーヤはこのように私に語った。彼は、いつもここで私に、神のもろもろの行為を語ったものである。
- (25) その日¹¹⁸、自身の苦行によって偉大なクリシュナ（ドヴァイパーヤナ）の弁髪が燃え上がり、火の色となって輝いたのである、親愛なる者よ。
- (26) 彼（ヴィヤーサ）のこのような苦行によって、また誠信 (bhakti) によって、大自在神は、満足して、欣然として (manasā) 決心した。
- (27) 三つの眼をもつ至尊者は、微笑むかのごとくに、彼に言った。「汝に望み通りの¹¹⁹息子が生まれるであろう、ドヴァイパーヤナよ。
- (28) （汝の）息子は、あたかも火のように、風のように、地のように、水のように、そして虚空のように、清浄にして偉大な (mahān) 者となろう。
- (29) （息子は）その状態を実現し¹²⁰、それを認識 (buddhi) とし、それを自分とし、それを抛り所として、威光によって三界を覆い、全き栄誉を得るであろう。」

[311 章] (B.324 章, C.12187-12214, K.332 章) シュカの生涯 (3) シュカの誕生

ビーシュマは言った。

- (1) かのサトヤヴァティーの息子（ヴィヤーサ）は、神から最高の贈物を得て、火を起こすのを望んで、火起し棒をとって¹²¹、擦った。
- (2) その時、王よ、至尊の聖仙は、自らの輝きによって¹²²、美しい姿をもったグリターチーという名のアプサラスを見た。
- (3) 至尊の聖仙ヴィヤーサは、その森の中でアプサラスを見て、すぐに愛欲に迷ったのである、ユディシュティラよ。
- (4) その時、かのグリターチーは、ヴィヤーサに愛欲にかき乱された心をもたせてから¹²³、雌のオウム (śukī) となって近づいて来たのである、偉大な王よ。

¹¹⁸P. tā etādyāpi B.,K.: etā adyāpi Sandhi irregular: tā etādyāpi Cf.Oberlies[Grammar]: 1.8 Double sandhi, 1.8.7 -ā < / -ās a-/, p.43.12.

¹¹⁹evamvidhas Cv. evamvidhaḥ, yathā aham evamvidhaḥ / (evamvidhaḥとは、私のような, evamvidhaḥ そのような, という意味である)

¹²⁰tadbhāvabhāvi Cn. tadbhāvabhāvi, tadbhāvam, brahma aham iti bhāvam, āśayaḥ bhāvayatīti tadbhāvabhāvi / (tadbhāvamとは、私はブラフマンであるという, bhāvam, すなわち、考えであり、それを、ひき起こす者が, tadbhāvabhāvi である) tad が何を指すか不明。Cn. のように、ブラフマンを指すのか、あるいはヴィヤーサの望む性質か。

¹²¹P. araṇīm tv atha saṁgrhya B. araṇī sahite grhya K. araṇīm tu tato grhya Cn. araṇī dve adharottare sahite mithunarūpe / (araṇīとは、両数であり、前後に, sahite, すなわち、一対の姿をした, という意味である)

¹²²bibhratīm svena tejasā Cf.Hopkins[Great Epic]: interrelation of the two epics, verses ending with the same diambic form, jvalantaṁ svena tejasā (R.VI.107.11d), p.68.5.

¹²³P. kṛtvā B.,K.: dr̥ṣtvā

- (5) 彼は、そのアプサラスが他の姿によって隠されるのを見て、身体に生じ、体中にあふれる (sarvagātrāṭigena)(愛) によって支配された (anugataḥ)。
- (6) かの尊者ヴィヤーサは、大堅忍によって愛を抑えようとしたが、グリターチーの美しい姿によって (vapuṣā) 心奪われ、噴出する心 (praviṣṭaṃ manaḥ) を、どうすることもできず (bhāvitvāc caiva bhāvasya)、抑えることができなかった。
- (7) 尊者 (muni) は、火 (を起こそうという) 願望によって努力し、心を抑えようとしていたが、不意に火起し棒に彼の精液が落ちた。
- (8) かの最高の再生族である梵仙は、心を動かすことなく、それまでと同様に火起し棒を擦った¹²⁴。すると、その火起し棒にシュカが生まれたのである、王よ。
- (9) 精液 (śukra) が攪拌された時に、大苦行者シュカ (śuka) が生まれた。最高の聖仙、偉大なヨーガ行者が、火起し棒を母胎として生まれたのである¹²⁵。
- (10) 祭式において灯された火が、供物を得て輝くかのように、シュカは、それと同じ姿をして (tathārūpaḥ)、威光によって輝くかのごとく¹²⁶、誕生したのである。
- (11) その時、クル族の者よ、本性清浄なる者は (bhāvitātmā)、父の最高の姿と色を (rūpa-varṇam) 持って、輝いた。あたかも煙なき火が輝くかのように¹²⁷。
- (12) もろもろの河川の中で最上のガンガー女神は、その時自分の姿となって (svarūpinī) 彼に近づき、メール山頂において (彼女の) 水で清めたのである、人々の支配者よ。
- (13) すると空から、クル族の息子よ、杖と黒い鹿皮とが¹²⁸、偉大なシュカのために地上に落ちてきたのである、すぐれた王よ。
- (14) ガンドルヴァたちは歌い、アプサラスたちの群は踊った。そしてもろもろの天鼓は、大音響で鳴らされた。
- (15) ガンドルヴァのヴィシュヴァーヴァス、トゥンブルとナーラダ、そして、ハーハーとフーフーのガンダルヴァは、シュカの誕生を讃えた¹²⁹。

¹²⁴P.,K.: *aranīm mamantha brahmaṣṭiḥ* B. *aranīmamantha brahmaṣṭiḥ* Cf.Hopkins[Great Epic]: *aranī mamantha brahmaṣṭiḥ*, hypermetric pāda, p.255.19

¹²⁵*mahāyogī araṇīgarbhasambhavaḥ* Sandhi irregular: *mahāyogī araṇī-* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, 1.1.3.1. -i / ī -a / ā, p.43.12. Cf.Hopkins[1901]: *mahāyogin*, p.365.9.

¹²⁶*prajvalan i va tejasā* Cf.Hopkins[Great Epic]: parallel phrases in the two Epics, No.176, *pradīpam i va tejasā*, p.425.21.

¹²⁷P.,K.: *vidhūmo 'gnir i va jvalan* B. *vidhūma i va pāvakaḥ* Cf.Hopkins[Great Epic]: parallel phrases in the two Epics, No.255, *vidhūma i va pāvakaḥ*, p.435.3.

¹²⁸*daṇḍaḥ kṛṣṇājinaṃ ca* Cf.Pandey[1969]: 2. The Upanayana (initiation), (xiii) The Ceremonies and their Significance, (h) Ajina, (i) the Staff, pp.134-135.

¹²⁹*hāhāhūhū ca gandharvau tuṣṭuvuḥ śukasambhavam* Cf.Hopkins[Great Epic]: parallel phrases in the two Epics, No.333, *hāhākāram pramuñcataḥ*, p.444.20.

- (16) そこにインドラを先頭にした世界の守護神たちがやって来た。そして、神々、神仙、梵仙たちもやって来た。
- (17) 風は、天のあらゆる花をここに降らせた。世界は、動くものも動かぬものも¹³⁰、歓喜した。
- (18) 大威光の大我（マハーデーヴァ）は¹³¹、女神と共に自らも喜んで、尊者のその生まれたばかりの息子を規定に従って入門させた¹³²。
- (19) 神々の主であるインドラは、喜んで、見た眼に素晴らしい (adbhuta darśanam) 天の水瓶を (kamaṇḍalum), そして神のもろもろの衣服を、彼に与えたのである、力強き者よ。
- (20) 何千というハンサ、孔雀、鶴たち、そして鸚鵡と青カケスたちは、(シュカの) 右側から廻ったのである、パーラタ族の者よ。
- (21) このように、火起し棒より生じ (āraṇeyas), 大きな威光をもつ者は、神々しい誕生を得た後、そこに住んで、聡明に振舞い、誓約を履行し、精神集中を行った。
- (22) 生まれるとすぐ、この者に、秘密の書や綱要書と共にもろもろのヴェーダがやって来たのである、偉大な王よ。この者の父にもやって来たように。
- (23) ヴェーダ・ヴェーダ支分・注釈を知る彼は、偉大な王よ、ダルマを考慮しつつ、ブリハスパティを教師に (upādhyāyam) 選んだ¹³³。
- (24) 彼は、秘密の書と綱要書と共にもろもろのヴェーダをすべて学んだ後、古譚、そしてもろもろの統治の教義書を完全に学んだのである、力強き者よ¹³⁴。
- (25) 偉大な尊者 (シュカ) は、師に謝礼を贈った後、(家に) 戻り、梵行者として、精神集中して恐ろしい苦行を開始した。
- (26) 大苦行者である彼は、少年であっても、神々や聖仙たちにとって、知識に関しても、苦行に関しても、教えを乞うべき者であり、称賛に値する者であった。
- (27) しかし、解脱の教えの方を見る (mokṣadharmānudarśinaḥ) 彼の心 (buddhi) は、人々の主よ、家住期を根本とする三種の生活期には満足しなかった¹³⁵。

¹³⁰P.,K.: jaṅgamaṁ sthāvaraṁ caiva B. jaṅgamājāṅgamaṁ caiva

¹³¹mahātmā Cn. mahatmā, mahādevaḥ / (mahātmā とは、マハーデーヴァは、という意味である)

¹³²upānayat Cn. upānayat, svaśiṣyaṁ kṛtavān / (upānayat とは、自らの弟子とした、という意味である)

¹³³brhaspatiṁ tu vavre Cn. svayaṁ bhātavedo 'pi śiṣṭācārapālanārthaṁ brhaspatiṁ guruṁ cakāra / (自ずから現れたヴェーダをもつとしても、賢者の振舞いを涵養するために、ブリハスパティを師匠とした、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: Brhaspati, a heretic, p.87, fn.2; Hara[1980]: upādhyāya appeared in the ritual context, p.112, fn.45.

¹³⁴P. rājasāstrāṇi cābhibho B. rājasāstrāṇi vīvibho K. dharmasāstrāṇi cābhibho

¹³⁵mokṣadharmānudarśinaḥ Cf.Strauss[1912]: Śuka, mokṣadharmānudarśin, sich nicht mit den drei Lebensstadien zu begnügen, p.256(64).16.